

路上文芸総合雑誌『露（Rojuku）宿』

2003年9月1日発行

# 露宿

第26号



Rojuku

## 露宿

### 目次

表紙写真	網本早祐美	
文中写真	岡田知子	
蔵の町ゆく	富士森和行	2
かるしうむ (Ca) ほか	城野昌夫	3
今日一日	只野酔払	7
地獄の底から今日わ!!	幻人!!アル・カポネ	12
朝太郎梗概	鈴木克彦(挿し絵も)	13
朝太郎の箱船	鈴木克彦(挿し絵も)	14
あの日の約束	ゆげこうすけ	18
恋の寄り道回り道	入矢たけゆみ	18
私の雑記から其の三	いさむ	19
歌集亡国の旗PART2	望月大成(挿し絵も)	21
クロネコ	ナベ	24
五行詩	近松雅之	
見えない実体…	五林修	25
願いは一つ	名無しの権平衛さん	26
旅路から	五林修	27
真夏の夜の夢… ほか	田代猛	29
日だまり23 ほか	秋戸空	31
無題	名無しの権平衛さん	33
俳句など	小一	
過去への旅 ほか	名無しの権平衛の皆さん	34
水道町より	高橋美香	35
あかい花	はり師いぬ丸	36
画	悔古	38
編集後記		

— 蔵の町ゆく — 一五首詠

富士森和行

わずかなる山林処分に親族らゆれる家裁の調停に来ぬ

(7/17 栃木市栃木家裁旭町支部)

権利譲渡に意を決めつ、も低き山脈見つ、おり父のふるさと

水運に拓けし蔵の町下都賀の山はなつかし面影辿る

蔵の町川べりの道残しきて文豪の出し生家を訪へり

(7/17 山本有三記念館に寄る)

駅前交番に道訪ふに警官の父を偲わす訛うれしき

また訪ねむと蔵の町あとに下野平野走りゆくかな

親族のお、かたわれと共に齡とりてこの再会の久しきを喜こぶ

善意の権利放棄をいつの日か父の墓前へ捧げにゆかむ

山苺の実の青く粒らな香き日に胸患いてるしわれの老塊

夜の灯にひとときわ冴えて紫の桔梗にわれの想ひの熱く

さりげなき路上の視点貧しき乍ら雑草のごと逞しく見ゆ

爪に灯をとすように現実をいかに生きむと路上にも売りくらす

ひっそりと神の棲まへるた、ずまひ小高き多摩の丘の修道院

(7/12~13 全国寄せ場交流会の会場となった日野市ラサール研修所前にて)

日韓親善の賛美うるわしこの朝会堂に充つ神の愛あり

(7/20 淀橋教会、ソウル国立大生のコーラス)

端傭の稚き一匹うら庭より入り来て遅きわれの昼食

7/20 自宅にて



## かるしうむ (Ca)

たとえばにぼしを

食べたからといって

骨が強くなるか知りません。

雀川から都幾川（ときかわ）の川面を

ながめたからとまた、いって

鴨がとんでいくのをみまもるだけです。

BEER 350CCを

つうCANのみほしながら

中学校のあかりを肴に

艶歌ばやしをうたいました。

ねぐらもたないたびびと！

黙している時刻（とき）が

叫びであるならば

”純”に酔っているのが

詩集 「(森羅万象) 旅路のうたもよう」より



### 城野昌夫

ささやかな宴（うたげ）でありましょうか。

所詮 かわらこじきで

踊りあかしているのが

歴史には残らないひとびとなのだから

わたくしにみならって

あゆんでいきますか。

若いひとたちは

わたくしが七〇才になったころには

あごがない日本人になって

埋まっていこう。

つよさはたえることではない

なにもないよわいひとが

うたい、いのりをする。

いつかひかりがやどります。

埼玉県比企郡玉川村字玉川

ある建設会社の宿舎にて

一九九五・五・八（げつ）二〇：三〇 はれ

# 迷路

みどりいっばいの村にて

びんの中の  
蛙ふたりが

ひとを見めるゆうぐれ

五月になって

南 あめ A M E の

田園風景が泣ける

蛙A—どうしたんだろうか

蛙B—俺たちをがらすの器にいれて

遊んでいる彼—

蛙A—今日もおやすみだとき

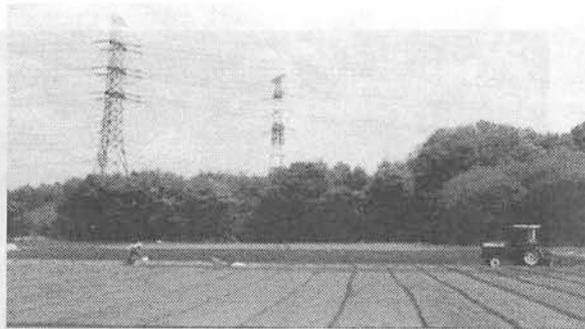
蛙B—晴れなければおまんまが

しやがっちまうてね

蛙A—呑んだってかわりはしないさ

蛙B—けせら せら

狂わせたのは人間たち



ありあまつてもかえりみないから  
つけあがる者がいるかぎり  
よくなりはしません

もどりたどるのが遠くなっても

いきていれば

くらい空も

ひかり輝く日がおとずれるから

待つしかありません

—埼玉県比企郡玉川村字玉川4510

にある建設会社の宿舎にて—

一九九五・五・一五(げつ) 一八:三〇 あめ

▼おぼえがき▲

五月十一日夕方、宿舎の柿の木と風呂場の窓の  
鍵の上に蛙が各一匹づついた。詩句のように蛙  
をかうことにした。蛙語はわたくし。

## 憧憬（あこがれ）

ひとにぎりの村には  
あかりが少しなので  
星がよくみられています。

よいの明星が雑木林の向こうの  
天空にかがやきをままして  
心平さんが  
わたくしにはぐんでいるのが  
よろしいではありませんか。

痛む腰が疼いてはいるが  
泣きことばを描かない詩人のように  
生きていかなければと  
思いなおして星座をかいまみる。  
熱い胸がいやしてねむりにつく。

—埼玉県比企郡玉川村字玉川4510にある

建設会社の宿舎にて—

一九九五・五・二一：五〇



## 淋しい夜光虫

午前二時

ねむれません

目がかすんでいるにも

かかわらず

たわらちよりの寢床に

はらばいになりながら

あれこれめぐり

—東京都台東区寿町II営団地下鉄銀座線

田原町下車3分かぶせるほてる

浅草712号室にて—

一九九五・六・二九（もく）二：三〇 くもり

## 空しい散策

つゆなかばの  
みなとくあたり

とらのもん—しばこうえん—  
だいもん—はままつちよう—  
湿った街並みながらあるく

まじかのれいんぼうぶりつじは  
もやにかすんでみられませんが  
はるかおがさわらをおもうと  
やりきれなく脳がつかくなりま

曇天はわたくしの  
心を見すかすように  
かぎりなくゆううつさを  
いざなわせていく

とりとめなく生きてはいるが



晴れる夏を  
まちながら栈橋にいる

—東京都港区海岸3丁目の

竹芝栈橋にてつづるうた—

一九九五・七・二 (にち) 八：一〇 くもり

### ▼おぼえがき▲

約六か月ぶりに東京でもっとも、魅せられる竹芝  
栈橋へうたをもとめてきました。

埼玉でのお勤めをおえて、一か月間は南千住の  
“どや街”に滞在し、そこでのひとびととふれあいの  
中で、わすれさられる者が多いことに悲しみを感じ  
た。

そして再び港区あたりを“埜”におきかえて、う  
たの旅をしている次第。

“ささやかないのちのうたのしるべ”

まさお—

# 今日一日

只野醉松



## —ロマンの名は癌子(続き)—

背中を怒突かれたら、ドーン。頬つべたをひっぱかれたら、ピシャー。足を蹴飛ばされたら、ドカーン。頭をぶん殴られたら、ガン。でしようか？癌でしようか。

ロマンの名前が癌子だなんて……。嘘だ、うそだ、嘘だ……。

イヤ、そうじゃない。ロマンが癌子なんじゃあなくて、ロダンが頑固なんだヨ……。

×××××××

(つづき)(露宿25号からの)

五月二六日、朝の仕事が終って、一〇時四五分に新大久保駅に着いた。プラプラ五分、社会保険中央総合病院に着いた。再診の手続きをして診察を待った。まもなく

「ロダン、診察室七番までお越し下さい。」  
のアナウンスがあった。

問診、触診、ロダンの話を聞いていたドクターはいった。

「重大な病気の可能性があります。だいたい、一週間で六kgというのとは尋常ではありません。今日は、まず、採血をして下さい。明日は一四時からCTスキャンをします。」といわれた。その

ニュアンスから、「これはガンかも知れない。」と思った。

この日の支払は薬代を入れると四九七〇円だった。

五月二七日、朝の仕事を終えて、一度部屋に戻った。一〇時五分だった。とにかくしんどい。しんどいから、すぐに布団を出して横になった。最近、ぐっすり眠れてないから、つい、ウトウトしてしまう。

時計を見たら一三時だった。ノラリ、クラリと起き出して、顔を洗って、歯を磨いた。ポトポトと病院へ向った。CTスキャンは四〇代に数回経験がある。登戸にある共済病院での人間ドックの時だ。

検査が終って、服を着て、CTスキャンの部屋を出ると、そこに技師か？医師か？いて、

「肝臓等には異状は見られませんが、胃のあたりが、かなり膨らんでます。かなり深刻な病気と思われれます。この先、胃カメラ等の検査をすることになりますと思います。」といわれた。いよいよガンだなあと思った。

会計を済ませると四四〇〇円也。

あたたあ。今度は金がない。これから先いくらかかるか見当がつかない。どう考えたって、時給一〇〇〇円のパート労働者が生計いけるわけはない。

昨年一二月、生活保護のトンネルを抜け出したと思ったのに、トンネルを抜けるとまたトンネルがあったんだなあ。背に腹は変えられないと思った。

昨年一〇月まで、お世話になっていた生活福祉の方に相談した。気持良く(勝手に決めて)話を聞いてくれた。ホットしたし、逆に励まされ、力を付けてくれた。

「明日、窓口に来て下さい。お待ちしています。」といってくれ

た。

五月二八日、生活保護申請、まだまだ生きていられるんだなあ  
と、思った。

五月二九日、預金通帳の記入をしていないことに気付き、朝八時に部屋を出た。パチンコ屋ドームのある通りが大久保通りだ。左側を行くと明治通りで、右に行くと新大久保駅。明治通り側へ五〇m行くと、郵貯デペンサーがあり、そこで記入できる。UFJは新大久保駅前にある。あとは三井住友銀だ。新宿なら間違いなくあるから、山の手線に乗った。メトロ地下街を伊勢丹方向へ、丸の内線新宿駅を右手に見ながら少し行くと、左手に三井住友銀の看板が見える。八時三〇分だった。四五分にならないと記入手続きを取れないらしい。仕方ないから待っていた。記帳が終って、靖国通りを横切っていた。

八時五〇分、携帯の着信メロデーが流れて、

「どうしたの、何かあったの、体は大丈夫なの。」との心配の電話だった。

「三井住友銀の記帳が八時四五分からなので遅くなりました。心配かけて済みません。今、歌舞伎町のドンキホーテの前ですから、あと三分もあれば到着します。」

書類等を提出して、色々な事情をお話しして、病院あて書類をいただいで病院へ向った。

一〇時一五分、再診の手続をして、内科窓口で診察票を提出した。もっと待たされると思っていたのに、すぐに名前を呼ばれた。七番診察室に入った。Eドクターはまだ若い女性、もちろん、当然美人と書くよりない。素敵!!とも。

フィルムを見ながら、ちよっといいにくそうに、ゆっくりと。

「限りなく、胃ガンの可能性があります。二日に内視鏡の検査

をしましょう。今日も採血をして下さい。」といわれた。

じたばたしても始まらない。ガンであることを確信しよう。最近の胃ガンなら余程のことがない限り大丈夫だ。不安もないし、特にイライラすることもない。気持はやたら平靜だ。

お酒が止って三年経つ。六月四日はホームグループで二年のメダルだ。お酒を飲めば終る命が、AA、仲間のおかげ、行政、病院、そして自省館等のスタッフのおかげ、ささえられ、励まされて、飲まないでいられた。お酒を止め続ける事の大変さを考えれば、他のどんな病気でも平気だ。アル中が、お酒を飲まないで生きているんだ。この事は、どんな事にも劣らない、貴い生き方なんだ。平静さを保てるのは、AAの贈り物なんだよなあ。

日に日に体が動かない。

五月三〇日、一日中部屋でゴロゴロして、少しでも食べる事ができれば、何とか土日の仕事に行こうと考えていた。夕方になっても、一向に体がいうことを効かない。やはり仕事を休む事にした。不動産会社に、

「急用ができたので、こん度の土日休ませて下さい。」と電話した。

そして、すぐに電話は自省館と話していた。

「明日、メッセージでおうかがいしたいと思っています。昼食を注文させて下さい。」と。自省館はロダンにとって母胎なのだ。AAのなかでは南多摩地区のにしき町グループがそうだ。

五月三一日、一〇時、自省館に到着した。

最終土曜だからバザーをやっていた。

Yさんは婦人服売場にいた。集會室にて。

「どうも、どうも、ご心配お掛けします。」

「思ったより、元氣そうだけど、ホントやせたね。」

さりげなく、明かるく会話を交している。

バザーが終われば当然パン・パーだ。にしき町に来てくれてる仲間がいた。三〇分程でやたらと疲れた。

昼食をこんなにおいしく食べられたのは久しぶりだ。多くの仲間と一緒に居る。

二月の中ごろから食欲がなかった。おいしい物、好きな物、今、一番食べたい物をいって、寿司や、焼肉屋や、洋食レストランへ出向いた。しかし、いつも食べ残していた。

第五土曜日のメッセージは南多摩地区が窓口だ。大勢の仲間が来ていた。雨にもかかわらず。ロダンも南多摩地区だから、当然みんな良く知っている。

メッセージが終わって、少しバン・パーをやったがすぐに疲れてしまった。夜、新秋津のミーティングに出たいと思っていたのに、体がいうこと効かない。泣く泣く諦めることにした。

六月になった。朝五時四五分〜六時一五分、一二チャンネル、スーパードライを見た。張八段対大沢奈留美女流鶴聖戦。張八段は今現在、本因坊の挑戦者で加藤剣正本因坊と戦っている。一〇時までウツラウツラしていた。

一〇時から将棋を見て、昼からのNHK杯は朝の大沢女流鶴聖対陣嘉鏡九段戦、大沢女流もう少しのところまで一日半負けになってしまった。おしい!!日曜日にNHK杯を見るのは久しぶりだ。土日の仕事を始めて一ヶ月になるから、それ以来ということになる。

六月二日、部屋を九時に出了。内視鏡検査室は四階、エレベーターを利用した。元気のいい時なら、たぶん、階段をかけ昇っていただろう。

受付を済ませると、左肩に筋肉注射をして、液体の麻酔薬を口

に含む。これは喉の麻酔だ。無味で感觸は水飴か蜂蜜みたい。少しづつ、舌の先からしびれてくる。五分くらいして、口に残った分を吐き出す。まもなく検査室に呼ばれた。

胃カメラを喉から通すのだが、特に驚ろくようなことはなく、スイスイと奥へ入っていく。喉が痛いということもない。麻酔のせいだ。見上げればテレビがあり、胃の中が見えるのだが、なんとなくロダンは目が悪い、見るのは諦めて目をつぶっていた。

二、三分して「組織を取ります」といわれた。胃の中でカメラが動きまわっているのに、何も感じない、何の自覚もなかった。

六月三日、火曜日は新宿保健所でお酒に問題を抱えている人たち、ケヤキ会が開催されているはずだと思って、電話をして確認した。一三時三〇分からは、今日の担当医師は松沢病院のUドクター、ロダンの入院時代からの担当医師だった。入院していた時、Uドクターに直接頼んで出席させていた。前回出席してからは一年以上も経つのに電話で応答された方は、ロダンの事を覚えていてくれて「ぜひ、お越し下さい。」といってくれた。

一時に部屋を出た。地下鉄東新宿駅から明治通りへ出た。あとは新宿通りを出て、左、四谷方向へ歩き、新宿御苑大木戸門の入口に入る道の角が新宿区役所四谷庁舎で、保健所はその六階にある。体調が悪くてトロトロ歩いたせいだ、小一時間もかかってしまった。

一三時三〇分からはテーマミーティング、一五時から、お茶を飲みながらのフリートークのスタイルを取っている。運良く、フリートークの時間にUドクターとゆっくりお話しすることができた。別れ際、「病院メッセージにも来て下さい。」といわれた。

六月四日、一九時にカトリック立川教会会場にたどり着けばい

い。二年のメダルだ。今日一日、飲まないで過ごしたいと思った。今日一日の予定表を考えた。まず、九時三〇分に部屋を出る。松沢病院一〇時三〇分着、外来ミーティングに出席して、終りは一二時だ。京王線で八王子へ行く。八王子労政会館に一二時四五分位に到着するだろう。その食堂でスパゲティを食べて、一三時三〇分からのミーティングに出させていただく、その後は立川の暮会所で暮を打って、一八時から夕食、一八時三〇分には会場に帰ることができると考えた。

全て、順調に、寸分の狂いもなく進行した。一八時に暮会所を出て、立川区役所近くにある「めしや井」へ向かう途中だった。一年ぶりに逢う仲間に出逢った。「やあ、やあ、久しぶり。」とお互いに挨拶をして、

「どうしてこんなところ歩いているの。」

「いや、にしき町会場がわからなくて。」

「なんだ、すぐそこだよ。でも、よく来てくれたねえ。」

「いやあ。ロダンの二年だもの。」

「それはありがとう。」

等、会話を交しながら、仲間が食事はいいというので、会場へ向った。

二週間程前までは、都立技術専門校に通うつもりでいた。問い合わせの電話があっても、学校に通う旨話していた。しかし、考えてみれば、ロダンの二年を口実に逢いに来てくれる仲間がいる可能性はある。もし、その時、ロダンがいなくなると、余計な心配をかけることは必定だ。専門校には水曜日は欠校したいとお願していた。月曜日のことだ。

一九時になった。ロダンの司会でミーティングは進行した。まずは、今日一日に感謝の黙想から始めて、二年のメダルをグルー

プチェアマンからいただいた。さまざま、むかしどのようであったか、そして、何が起って、今どうなっているのが話された。やがて、二〇時三〇分になろうとしていた。ロダンはいった。「多くの仲間の話を聞かせていただきたいと思って、時間よ止まれ!! と念力をかけました。しかし、時は止まることなく、変ることなく、いつものように、何ごともなく進んでしまいました。思うに、最初から念力をかけることなく、ホットケーキは良かったんですね。」

「では、これでミーティングを終らせていただきます。ハンドリングで小さなお祈りをお願いします。」

— 神さま、私にお与え下さい。

自分に変えられないものを 受け入れる落ち着きを!!

変えられるものは 変えてゆく勇気を!!

そして、二つのものを見分ける賢さを!!

どうも、ありがとうございます。また、帰って来いよ!!! と唱和して、ミーティングは終わった。無事に平穩に今日一日が過ぎた。

六月五日 九時三〇分 内科診察室七番に入った。美人で素敵なEドクターは、フィルムを見つめていた。

「ロダンです。どうも、いかがでしょう。」

「ええ……。これは……。です。ええ……。」

何か話しくそりにしている。ガンの告知がしづらいのだろう。ロダンは気楽な口調でいった。

「胃ガンですよ。私は大丈夫です。充分に予測していましたから。」

「ええ、そうです。胃ガンです。手術になります。外科が担当します。今、外科に問い合わせますから。」

電話のやり取りがあつて、

「今から外科へ行って下さい。あちらで待っています。看護婦さんと一緒に行つて下さい。」

外科に行くと外科の看護婦さんが待っていた。

診察室に入ると医師はフィルムを検討していた。

「ロダンです。今、内科で胃ガンといわれました。病気でですから、全て先生におまかせします。宜しく願ひします。」

「わかりました。手術は早い方がいいです。この状態では、固形物は食べられません。えくと。一番早い日が六月二五日です。この日に手術をしましょう。入院は二週間位前がいいですね。」

といわれたので、

「先生、六月八日に東京都の本因坊戦があるので出たいと思ひます。次の日曜日もたぶん……。もちろん、八日に勝ち残れたらなんですけど……。」

少し考えて……。

「それでは、入院日は一八日にしましょう。家も近いということだから。その前に検査を入れます。まず一〇日にもう一度胃カメラをします。一二日は外来診察。一七日はエコーです。必要なら一二日に又、考慮しますから。」

胃ガンの治療が始つた。次々と予定が組まれていく。病気のだから、全て医師におまかせだ。ガンといわれて、むしろすつきりした。どうなつてるとわだかまりが消えたからだろう。すがすがしい気持になつた。

六月八日、八時三〇分部屋を出た。市ヶ谷の日本棋院会館で一〇時開始。順調に勝ち上り、お昼になつた。胃のあたりがすつきりしないし、食欲もない。昼からは一二時二〇分から対局。

集中力が無いし、どうにか座つていた。ただ基石を指には喜んで、

碁盤に石を置く作業が続く。五〇分の待ち時間が一〇分程過ぎたころ、相手の時計は残り五分だつた。一五目の大石があたりになつていて、それを逃げるすべはない。おもむろに、ゆっくりと石をはがしていると、相手はいつた。

「ありません。まいりました。」

「どうもありがとうございます。」

といつて、対局票を持つて受付けに行つた。

三二名のトーナメントは抽選だ。C—20番だつた。六月一五日、一〇時から本戦だ。この体調では、なすすべはないだろう。ベスト四に残れば、六月二二日は準決勝、決勝だ。しかし、それには一五日に三局勝たなければならぬ。

ロダンの囲碁はこれからだ。実力は良く知っている。ただ、ガンといわれて欲がなくなつた。無気力でなく、AAでいうところの無力で戦つている。そして、ハイヤーパワーの応援がある。

本戦は、今日一日を、この一局に置き替えて打とう。

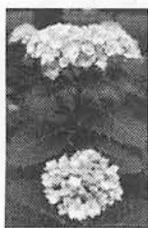
こうして囲碁を打てるのも、飲まずに今日まで生きてこられたのも、仲間に、ハイヤーパワーに感謝なのです。そして、今日一日、今日一日に感謝。感謝。ただ感謝。

××× ××× ××× ×××

路石蹴る 紫陽花の花 癌と云い

一輪の 紫陽花の花に 見守られて

手術待つ身に 梅雨の陽が差し



平成一五年六月一日、記



ボンジュール・フロム・ザ・ボトム オブヘル!!

# 地獄の底から 今日わ!!

Bonjour from the bottom of Hell !!

87人!! アル・カポネ (作)



87人!! 信長 (作)

① 不要なら すて、 焼却 露宿 かな

87人!! 秀吉 (作)

② 拾われる 如く 仕組まぬ露宿 かな

87人!! 家康 (作)

③ 拾われる 時まで待とう 露宿 かな

お初にお目文字します。どう云う訳か米国のアナザー・ワールドからイーエロー・ジャップ現界にワープされました。現在、ジパング收容所列島の絶海の孤島の獄舎から東京府中の医療▲▲に押し込められ、ヒョンなコトから差し入れられた露宿を拜読させて頂きました。

生前は全く日本とは無縁でしたが、気が付いてみたら塀の中の日本の、有名な青年×の肉体の中に封印されて居たのですヨ!! クリビツ・テンギョウ↓ビツクリギョウテンしています。前置きはこの位でーと。

①は説明ー不要ですネ。②は、誰からに拾われる様に露宿が新品で、非常に目立つ大通りに↓落ちて居る!!のは、繁華街のゴミ入れの一番上にやはり目立つ如く露宿が顔をー出して居る!! と言う風景に仕組まねばーなりません、それを仕組む仕掛け人軍団は当然、無念にもアル中で絶命された方とか、難病葉中で野垂れ死した方とか、プライドが高くて福祉課やボランティア、支援者等とは完全絶交して完全自我自尊を順守して、あえなく路上や福祉課付近で餓死した人々とかの(怨霊・軍団)となりますネ!!

あの御霊前否、後冷泉(氏)が偶然拾った24号の露宿も、実は偶然拾われる如くに見せかけて、必然、拾われる100%拾われる如く仕組まれて居たので、ござんすーヨ!!

美空ひばり さんの命日は6月24日ですが、何と、その6月24日の朝、氏は拾ったんですヨ!!

24日と24号。ピツタリですネ。24と言う日は何と日本地獄界の救世主の、お地藏様の命日なのです。

ひばり様にも石の地藏さんを歌った作品がありました。確か(花笠道中)だったかな、映画の主題歌でー

驚きですネ。桃の木もサンシヨの木も、出る幕ありませんネ。

③はチョツと難解難問です。たとえ、拾われる様に全部仕組んで居ても、現界の突然のハプニングや、異界の邪鬼魔王・霊団が登場すると、いくら待っても、拾われるチャンスが、永久に〇と云うケースも出て来ます。

コレでは87人・大首領様の家康閣下と云えどもお手上げです。では、どうすれば、私、アル・カポネ・87人は、100%? 思案を重ねた結果、ある結論に達したのです。私の発明した? 次元転換器を使用して、霊界現界Ⅱ両界を〇次元にして、最新号の露宿を拾って下さる愛読者軍団のみ、超次元世界・ゾーンに存在せしめるところ企みなのですが、如何なものでしょうか?



㊦部落というコミュニケーションを作っている朝太郎の夢枕にアクマが現われお告げをする。

それは、神々が人間に見切りをつけ、生きている人や生き物を皆亡してしまおうと、七日後に大洪水を起すから、アクマのピンクメガネに叶う朝太郎よ、箱船を造って世の狂人、痴人、無頼漢を集めて船出せよ、というものであった。

朝太郎はさっそく金を集め、スクラップ寸前のタンカーを買い込み、それを解造し、ガスタービンを設置して、二十万トンの糞を入れ、それから発生するガスによってタービンを回す仕掛けで動く船に改造する。

一方、あらゆる機関を利用して世界中の人々に、地球の危機を訴え、㊦部落の連中と、奇人、変人、狂人らを集め、かつ食料や動物などを大量に船に入れ込んだ。

はたして七日後に大雨は降り出し、世界中が水びたしとなる。雨がふって四日目に巨大なタンカーは水に浮き、七日目にはアクマの御心に従って、行くえ知れぬ航海に出るのだった。

朝太郎一派、総勢二千五百人の痴人狂人悪人は、地球上の人間、動植物が死ぬのをしり目に船出はしたものの、四十日も降

りつづく大雨と大嵐に、人々は不安と恐れとノイローゼになってしまふ。そんな中で、特に数の少ない官僚やら知識人は、船中でゴロゴロして規律のない変人や痴人との船底生活が辛く、ガマンできず、今まで通りの常識や習慣、規則によって生活しようと考え、そのためには船と人の主導権を握って、その力で痴狂人を従わせようと反乱を試みる。だが、長いことこうした人々によって虐げられてきた人々は、狂人痴人こそが真の人間、アクマに選ばれた最高の者としてこれを許さず、船中むごい戦いが始まる。争いは官僚役人達の負けとなり、我々大多数の痴狂人を虐待したとして裁判され、有罪とはなるが、奇妙に痴狂人、㊦幹部のリーダーを討てる形勢となる。その時、朝太郎の一声で争いの総ては解消とされ、痴狂人も普通人もアクマよりいただいたお命、争うではないとさとされ、朝太郎のクレジニア構想を聞かされ、明日は晴れると言明されて、みんなは心の晴れた気持になる。

二部に入って、果たしてアクマの予言通り、四十五日目に空はカラリと晴れ渡り、波もなく、人々は待ちに待った乾板へ出るこゝとなつた。しかもアクマの恵みを満喫しつつ、この日を我ら五族共存のクレジニア建国日として、全員が祝うこととなつた。みんなは百鬼昼行の化粧行列を行い、更に船底から人の数の倍以上の動物が乾板に出て日光浴とオンパレードで自らの存在を大いに誇示する。



三 百鬼昼行の章

八絃一字のクレジニア 討てやこらせ  
 や普通人 クレージー晴れの大空に  
 青天薄痴旗を四方に翻せ  
 青い空の下 青い海の上に王道楽土  
 狂人 痴人 天才 変態 奇人の五  
 族共栄共存  
 ーてなことをわめいている語り部のわ  
 たし 奇怪なことに気がついた  
 ごく自然に 自発的に 幸なら歩こう  
 よとばかり 左回りにみんなが乾板  
 歩き出したのだ  
 さつきは五人の赤子の発見! 次には  
 人々の自主的集団もの歩きの不思議  
 発見 こんなことあったためしはない  
 いつも身勝手でもとまったことのない  
 人々が一緒に歩き出したのだ  
 ということは みんなそれほどバカで  
 はなかったということか ハハハそ  
 れもいい きょうの良き日はクレー  
 ジーカントリーの生まれたまよいき  
 日なのだから 日そのものが狂って  
 しまい 日はまた昇りまた狂うのだ  
 ㊦のキャンプも後追い対策で 怪物ラン  
 ドのプカドン行進曲に 東京オリソ  
 ビックの行進曲をコキませたような

曲をばやり出した  
 ンダラッタ ンダラッタ ンダラッタ  
 ダラッタ ズンダズンダ トッタラ  
 ッタ  
 スケベのマーチがプッカプカ フラン  
 ス奇人も飛び出して 笛吹きやコプ  
 ラがクレークネー(注)  
 曲に合わせて狂人共が歩くのだ さあ  
 狂人絶対主義 痴人大航海時代 狂  
 痴ルネッサンスの昼すぎだ たわけ  
 だ草分け 狂人大革命の幕あけだ  
 なぜなら万国狂人旗を持つ性の女神  
 シマウマ女が片方のオッパイ出して  
 勝利の女神バリに歩くから  
 その後ろから 二挺拳銃持って続く小  
 供 次がボーシを被って狂ってつい  
 てくるのが どうやらドラクロアラ  
 しい  
 恥もオクメンもなく 生きぬいてきた  
 厚かましい この日に歩く人々は  
 大善人で大悪人 甲乙つけがたい大  
 悪人  
 死にかけたヤロウが生きかけたことは  
 生きかけたジョロウが死にかけたよ  
 りも喜ばしいと考えた方がよいようだ  
 このイカレかけている語り部のわたく  
 し奴にも分かりかけてきた

分かるうが分かりかけてこようが 忘れかけようがそんなことはどうでもよい

今や天上に輝く太陽と同じように 船の客達よろこびの クレジニア建国記念日第一日目を元氣に行進したことだ

狂人の一步は小さいが 狂人類にとつて偉大な一步なのだ 二千五百歩なのだ 見よ地球の海も空も青かった この美しい地球を普通人に汚させてはならない(注) 科学・機械・IT糞喰え

みな四十四日も押し込められた苦しい暮しにオサラバと イツキに幸福カミシメようと わいのわいのと叫んで狂喜する

世界中のバケ者共がめいめい勝手に歩き出す その諸々の番外は 物質愛者 一角仙人 キジムナー 汚物趣味 五重人格 意志薄弱 カラス天狗 持出し差出しネエちゃん(ここで一息ハーハー)

ジャンジャントロプス・クレジネンシス 自己顕示氏 二つ目小僧 同性愛者 こぶつき爺さん 児童嗜愛

醜い白鳥 大クラウスと中クラウス トツカピ 動物嗜好獣毒者 ピーターハムに自己最愛主義者 ぎしき童子 薄虎マンに エクスビジョニズム者 窃盗人 マンビキ少年 非行少女 (息切れてして ハーハー再び 深呼吸して)

大狂いの大食いの 大食知不足の食当り トラホーム保持者 石頭の肝硬変者 はちかずき 一寸法師に 酒呑童子 髪をふり乱したXデューサに 人の酒はバカスカ呑むが出す物は舌を出すのも惜しいバツカス あつちを睨むヤブニラミとこつちを向く雷おやじ 醜と肉欲のビイナスとキョンシー

まとも人のマネして痴呆人をバトウして行く真狂人 狂人の仮面をつけて歩く石頭 野郎自大に 五十歩百歩の自惚れ屋 半獣半人の反抗人 ケイメイ狗盗のホマンチュー

さあさあ百鬼昼行 百鬼撩乱の大打進だ 踏み出す足も軽ロヤカニ 降り出す手もそろわない リズムにのらず曲に流れず さっそうと めっそ

うもあると歩きに歩く Oメン Gメン ヒヤソーマン 白鳥の湖を踊る愚人も ワルプルギスの昼ぼらけ カクシもフンドシもあるものか ノミシラミ狂人が尿した着物をサラリと捨てて 熱い狂人共のうずの中に参ろうぞ どうせ後で寒くなって着るくせに

粉骨碎身無理して生きたナラズ者 衣食満ち足りすぎて礼節を失なった者が喜ぶほどに不快になってヒニクレテ 空しくなって歩く人 サ 鰐になって踊ろう ギャベツジ船の甲板を昼日に向つて歩こう

見るもの言うことコトバにならず やること成すこと汚ないことばカリ 言うことスルこと全く別々 考えることはそれをも飛びこえる 草木国士悉皆成仏の世に バカブリス

トの頭はミツソクン みな不純物 ただ有るってだけのもの ただ食って息して眠れば天国 無用の不要者 明日をも知れぬ命の狂者狂若が 性と命と食を謳歌してイバツテ歩いてい

ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO

るばかり

スツカラピンに晴れ上がった太陽の下  
みんな裸で踊れ マンボチンボでマ  
ンボを踊れ マンボバッカーと マ  
ンボアッホーと

サンバのリズムに狂いながら 猿のサ  
ルサに酔いながら 羅漢サンがそろ  
たら 回そじゃないか ジョヤサジ  
ョヤサと(注)

そんな人々の真上にのぼった太陽は  
タダで無償で光と暖かさを人に与え  
る アクマさまは度ケチでも 陰気  
な顔もしないし エバラない 脅さ  
ないし 恐しい顔で笑ってござる

村のはずれの地蔵さんのように  
だから安心して三百メートルの長さ  
と四十五米 のカンパン歩いて踊って  
這いずり回れ

真ん中ゾーンは歩き疲れた人のヤスマ  
場所 寝たキリ老人やアクマの赤子  
イザリなどが座ったり転げたり

それではみんなの声に耳を傾けようぞ  
「あいつは良家のお嬢さん 上流ダン  
ナと結ばれて 財産名譽子宝に恵  
まれながらもアホーな自由で憧れ  
て 総てを捨てて下層社会に下り  
てきた

てきた

今の生活楽しいと ケッコケーッコ

「鶏みたいにはしゃいで歩き回る」  
骨格貧弱 人相手相も悪く 金に縁  
なし 待ち人キタラズの大凶人  
方位性格みな悪い閑運者 兵隊ケ  
ンサは丙種不合格

ネコつき蛇憑きキツネ付き 運も根  
もツキ果てた苦痛人 アイウイッ  
シユ アイワーバード と念じて  
鳥になつてしまつた人と早起き鳥  
に見つけられた人間虫

一生根ナシ草 浮浪人生の経験者  
世の悪癖 人の雑霊までひっかぶ  
りオマケニヤかんのお湯ヒツクリ  
かえした灰カグラの拝み屋サン  
悪因業の悪報い 宿業 罪障 悪障

タタリに悪霊憑依のモーロク爺  
人生世間に復讐されっパナシでよ  
くぞ生さ抜いた  
ヒラヒラのケーハク兄ちゃん ロク  
デナシの終りなし グダラグダラ  
の慢子漫子の稼ぐに追いつかれた  
貧乏兄弟

「チンタラボンタラ小僧っ子め シナ  
ビタ婆のマンボ見ろ! ベッタラ  
ベッタラ御老体 ヨチヨチ歩きの  
幼児まで

幼児まで

この世で一番下らねえものこそ一番

「大切 イミのないものこそ下るもの」  
ああ 限りなき夢 それは天気 そ  
れは海 暑い日射し 青い空の下  
に新時代を迎える我らアンタツチ  
ヤブル 悪魔の呪

限りなき喜び それは自由と解放  
あふれる肉体のエネルギー 輝く  
明日への希望

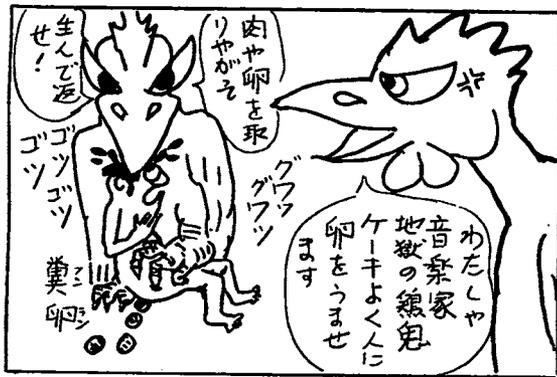
溶けてすき透つて 青く涼しく暖か  
く 時々キラリと光る 我ら心の  
宝石」  
怒りの虫の方も一席ブチ始める  
「怒りも怒り大怒り そのタメニ  
友も妻も殺してしまつた大狂い  
今では何んのタメに怒つたか  
死とは何かサエ忘れてしまつた  
それでも手前の命は可愛いらしく  
船に乗つて命を長らえ甲板アリク」  
ハメラレ娘も歩いてる この語り部  
が娘に代りて読める歌のひとくさり  
「誰にも抱かれ 誰にもフラレ  
便所ガワリのおまんちよの  
それでもお前はコリ知らず  
××× ×××××  
○○○○○○○○

だげど船のバカな人達大変親切

チジンは真剣に愛してクレルし  
 チエおくれの者は尊敬してクレル  
 ありがたい 地獄は真の天国  
 本当の人生 本当の人間愛——  
 原始主義の文明否定者 科学不万能主  
 義及びそのように洗脳された患者達  
 知りたがり屋にうれしがり屋 叫びた  
 がり屋に 見せたがり屋見タガリ屋  
 ガリヤラ地方のガリガリ猛者のヒゲ  
 ゴジラ  
 こんな行進みたらオリンピックもワ  
 ルドカップ 馬バシリ自転車バシリ  
 など小バカくさくて見ちゃおれん  
 ハッキリ言っであんなのヤメレ 人  
 類差別の大代表 金メダルを鼻にか  
 け オレは一番偉いと思っってみても  
 痴狂人に遠くオヨバナイ  
 チリアクタ小虫之介もユーテオル 一  
 億の普通人は痴狂人の一行にしかずと  
 箱船人もゆーておる 人間は自我を主  
 張誇示するのではナク 自我を滅却  
 脱却捨て去るものだと——  
 さて行進に パン助観音様タチの御登  
 場 娑婆地獄の中に光を放ち徳を与  
 え人を救い 地獄の中に光を放ちた  
 まう女神達  
 世のため人のため 身と心を犠牲にし

アクマの法を説いた尊き生き菩薩  
 オイランの道中だ  
 けど世にウチヒシガレタ夜鷹遊女に技  
 芸達 それゆえに 方々猛然と拍手  
 に喝采 さすが痴呆狂悪変奇の人々  
 だ 真の女性を知り最高の礼を惜し  
 まない  
 彼女達 栄光の報われた晴れの独立日  
 を 本日は好日となし 来世では必  
 ずや蓮華の花上に化生するであらう  
 南無無上アクマ尊——  
 マヤクの神もやってくる チレムを持  
 って鼻からキカン車の如く煙りを吐  
 きながら ハッシッシの神はどこへ  
 行くのでしょうか  
 だがお次は——ちよいとありがたいと言  
 うべきか ありがたメーワクとゆう  
 べきか 小象に乗って背中にて七色の  
 光背つけたフゲン菩薩がやってくる  
 何んとなく罪当り  
 だが おお ミゼラブル やられてし  
 まった 神も仏も恐れぬ者達にムリ  
 ヤリ引き落サレ踏まれてしまう  
 パン助観音があんなに人にモテたのに  
 男のボサがこんな目にアウなんて—  
 彼ら—人生是れイミなく 神仏是れネ  
 ウチなく すばらしきは赤ん坊と痴

狂人だと信じてるアクマ信者 当然  
 の報ナリ  
 (つづく)



(注) は、引用、書き替えたもので、必  
 要があれば(著作権などの問題)、これを  
 正式に届ける用意があります。

# あの日の約束

## ゆげこうすけ

(一)

星を見詰めて想い出を  
独り侘しく 今宵も深ける

せめて愛しの 面影を

波に浮べる 船の上

§ 其の二

♪海は大波

レレレレレ

レレレレレ 続くやら♪

(一)

夢をまさぐる この俺に  
啼いて呉れるか 波間の鳥よ  
せめてあの日の 想い出を  
胸に抱いて 旅を行く

(三)

俺は孤独に 今日の日を  
流れ流れの 船乗り稼業  
せめてあの日の 約束を  
胸に聴かせて 旅を行く

挿入歌『海』オルゴールのメロディ  
I & ハミング及び合唱  
§ 其の一

♪海は広いな レレレレレ  
レレレレレ 日が沈む♪



# ♥恋の寄り道回り道♥

## 入矢たけゆみ

(一)

生まれ故郷が 恋しくなつて

やつて来ました 歌舞伎町

心安らぐ 憩の広場

さみしがり屋の 回り道

姐ちゃん寄りなよ 話をしよう

故郷のあの娘に 似ているぜ

恋の寄り道 回り道

(二)

女袖ひく 駅裏あたり

潤む灯の百人町

泣いて笑つてその日を生さる

恋のエンゼル 上げ雲雀

ニイチチャンアソポーツ 流し目おくる

親にはぐれて 啼くカラス

恋の寄り道 回り道

(三)

肩を並べて 新宿御苑

やつて来ました 気晴しに

四季の花々 芝生の広場

さみしがり屋の 回り道

一日のんびり 転た寝しよう

勿忘草の花のよに

恋の寄り道 回り道



# 私の雑記から

## 其の三

### いさむ

春さやか 小雨降り 肌寒く

孤独まぎらす 新宿御苑

庭園に 色鮮やか つ、じ咲き

芝の青さや 五月かな

(四月三十日 思い出の御苑にて)

花だより あと振りむかず 明日も又

悔いなく咲かせ 人生ざくら

花片が 名残りを惜しむ 公園で

女性の会の 笑顔 漂よう

(四月十三日 中央公園にて)

新緑や 風もさわやか ミニ花も

朝日を浴びて 誰を待つやら

倅せを この身で感ず 新緑に

翔ばたけ 空に 舞え鯉のぼり

新緑の 風に誘われ 気紛れに

着きしところは 新宿御苑

悪がきと言はれ頃が なつかしい

ひとり暮しの身のはかなさよ

限りなく 荒波こえて この身でも

年には勝てぬと 指折しかな

過去の罪ほろびしの積りが心にあるならば

嫉妬 強欲 傲慢 虚栄 を捨てろと…

五月十六日

一粒の 米の尊さ 噛みしめて

義理の重さの 情けに 濡れて

落ち振れて 人の情けが 身にしみて

我れの運命は 一日 一善



梅雨時に 一輪咲きし 朝顔の

色鮮やかさ 心がなごむ

(六月十一日)

人は逝く 我もいつかは この世から

消えゆく人生 これも運命

(名脇役 名古屋章を偲んで 六月十三日)

静けさや あじさい咲くを 眺むれば

思い出綴る 色とりどりに

梅雨空に 青々繁る 朝顔に

熱き思ひを 天にと仰ぐ

(七月七日)

ヘルパーに 介護を受けて 早や十月

いつも変らぬ 微笑む えくぼ

雨が止み たゞひたすらの 一と時を

思ひに更けて 我が行く道を

今も尚 腰の痛さに 夜は長々

明けゆく空に 雨音 さやか

梅雨明けが 待ち遠しいと 朝顔が

我れにさ、やく 憂いなさ 日々

送られし品をば 手にし なぜか知ら

臉やきつき 頬をば 濡らす

梅雨あけの 日射しがまぶし 裏庭で

伸びゆく蔓に 手入れする我れ

義理と人情秤にかけりや義理が重たい男の世界

私には身につまる程の歌詞である。この世の中には金では済まされない運命がある。過去にさまざまな誘怯を持ち宿命転換と軽くは言ふがこれさえも俣ならない。金が無くとも自分が消費したので後悔はない。後悔するだけで無駄な神経を使ふだけ野暮である。人から義理と人情を頂き、こゝまで生きて来た世、これを味わえば、その義理を果すことのみが私にかせられた義務である。



国旗「日ノ丸」の起源



天照大神歌

歌集  
亡国の旗  
PART 2  
望月大成

日ノ丸は国旗にあらず 一億人  
総馬人化  
亡国の旗

君が代の君とは誰ぞ 我知らず  
もしやアメリカ  
大統領では

天照 お股隠しは白地にて  
赤き日ノ丸  
月のものかな

天照 さぞやお嘆き 雲の上で  
股のおむつが  
国の旗とは

天照 痴女にあらぬに痴女にされ  
赤きメンスに  
馬が群がり

天照 泣けて悔しき 知らぬ間に  
男系一家  
馬人の国

天照 レズっ気あらば牝馬の  
裸踊りで  
岩戸お開き

天照 神という名の 子種なき  
ラバに囲まれ  
お子達はなし

天照 泣く、迎えた婿養子  
名は神武とて  
馬の骨なる

馬の骨 天下を取らば天皇家  
馬人国家  
事始めかな

日ノ丸に赤のまん丸 二つなし  
股のお穴は  
一つなりせば

白き池にメンス一滴 赤チヨンも  
これじゃ台なし  
梅千の旗

日ノ丸の痴女のメンスに通失せて  
久米の仙人  
馬落ちの段

日ノ丸は見れば見るほど殺し屋の  
赤き鮮血  
馬潰す旗

国旗には菊の御紋を当てるべし

秋マゲドンで

S M のショー

戦争で人を殺しの日ノ丸は

今は馬人<sup>うまじん</sup>

屠殺場の旗

大江戸は馬があぶれの大震災

日ノ丸なまず

大暴れして

日ノ丸を上げて国中 黒装束

白地と赤は

極道の旗

日ノ丸を押しつけられて馬教師

逃げ道なくて

あの世生きとは

日ノ丸を甘く見たれば馬教師

命引換え

やくざ屋のドス

国旗なら黒地に白の月とせよ

神国日本

馬捨の国

大江戸はどこもかしこもがきの巢

黒の街宣

日ノ丸の旗

日ノ丸は落ちて上がれぬ馬地獄

阿蘇の火桶を

空に崇めて

国辱の旗にあれば飾るべし

マンモス城に

日ノ丸の旗

揚げたくも揚げて恥ずかし 国の旗

馬捨山の

笑いものでは

死神の鮮血手形 日ノ丸は

馬を賭殺の

殺し屋の旗

馬と人 掛け合わせれば玉抜き

日の丸牧場

馬作る国

権力は勝ったつもり真理教

殺人説法

まだ霧の中

ハルマゲドン 自作自演もわざの内

玉ぬき馬に

目覚ましの檄

君が世の君は帝<sup>みかど</sup>にあらぬなり

秋田小町は

千住の人

アーサハラ 見る目なければ村井流

底ぬけザルは

ミスキャストかな

乃木に似し悲劇の人はアーサハラ

能無し参謀

丸抱えして

山日旁 通してならじ 非常線

大臣視察

玉姫の陣

大臣のお顔拝めず 玉姫で

閨所政め

忍者ごろゝ

浅警のブラックリストは赤マーク

オウム上がり

過激派となり

歌作る文武両道 道険し

ペンを右手に

左手にチャカ

売出しの大根役者の気分かな

デカがぞろゞ

カメラ抱えて

道行けばデカがバチゞ プロマイド

我が手もとには

一枚もなし

不景気で馬のリストラ 妙手なし

殺し屋オウム

復権の年

賃金の不払い常習 ヤーコ系

解体業者

馬も解体

文部省 嘘ばっかりの唱歌かな

蛍と雪は

馬人の小屋

日ノ丸にプライドあらば白妙に

馬の生血で

丸は作らず

亡国の印なればぞ 赤丸を

消せば敵前

降旗の旗

惜しむなら同期にあらず 青柳の

枝垂れ桜ぞ

敷島の花

馬捨山 人が馬人 馬が人

シチャカメツチャの

ごった煮の街

看板を今様風にお塗り替え

天長節が

建国の日に

閑人のおほネ休みは建国日

山谷の馬は

飯にあぶれて

ギャンブルは去勢の馬にロボトミー

ダブルパンチで

天下太平

日ノ丸のまことの姿 黒地張り

赤丸入れて

山賊の旗

太平にあらぬ世にこそ日の丸は

天下国家の

任侠の旗

番付は一級上の警視正

浅警ボスは

三段の格

対決の相手に不足 何もなし

めざすはサッチョ

長官の首

本音では同じむじなの一つ穴

尊師麻原

権力の友

リストラはまずは山谷と釜ヶ崎

サリン使えば

たった一夜で

行倒れ 馬は掃きだめ シート巻き

サツが始末も

銭はお役所

時は金 命あるもの 皆老いぬ

廻り舞台は

大根の役

信州の望月村は我がルーツ

手合がポイント

五百円玉

金町の情けは受けず 分れども

知らぬが仏

我は新顔

戦争で足手まといの大掃除

尊師麻原

山のみ出まし

ぶた、けば馬はます、暴れ馬

鋳物も鍛えば

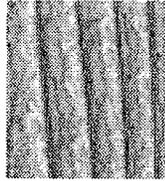
鋼なりみろ

御家紋が菊にてあらば前門の

天ノ岩戸は

誰様の紋

ワネコ  
道はたのワネコをゆびさして。  
「オ、ブラツクだ。ブラツク!  
俺と一緒だ。ふ・さ・く」  
と言って傷だらけの顔で  
ニヤッと笑い。  
詞子はすれの酒を  
歌を がないながさ  
男が去っていった。  
ナベより



衝動

売られた喧嘩は

衝動買いするな

真の侍は

最後の最後に

刀を抜け

ネオ・サタン

法を学び

経済を学び

心理学を習得し

社会に羽ばたいた

悪を為すために

氣化

海辺のスタンド

焼ける陽炎

冷たいコーラ

氣化する思い出

冷やして留めて

胃腸薬

誰かどなたか

胃腸薬をください

起きて寝るまで

腹痛がやまないんです

誰かどなたか

## 五行詩

近松 雅之

人間

狡猾者が

複雑な頭脳で

支配する

上空で舞う

慈悲深い天使

コーボ野村

襖が動かなくて

夏は涼しく冬も寒い

一人寂しくても

ネズミの音で

理性を保てた

猫

本箱の隅

くずかごの中

引き出しの裏

狭いところが

お好きのよう

太陽の下

形勢不利な

状況が固定化

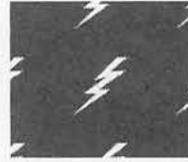
猫は虎を

噛めるだろうか

太陽が照らしてる

## 見えない実体についての明白な論証 望んでいることについての

### 保証された期待



### 五林修

十八年間の路上生活は終わったが、人生航路上の生活は続く。越年越冬の取り組みがひと段落した一月十日、山谷の路上で私は焼酎を飲んでた。アルコールが蝕ばむ体と心からは、路上に停めてある出張手配の車に乗る気力は湧いてはこない。でもなく朝から飲酒。

正直、駄目なアルコール中毒者である。

ふと、大江健三郎の“下降生活者”の冒頭部分を思った。確か“僕はアルコール中毒者でもーない。”だったろうか。新宿の路地裏で出会った教授と学生の関係だったろうか。

こんなことをぼんやり思いながら、焼酎をなめる。なめる程になるとは、もう、飲めなくなっているはずである。しかし、手からアルコールを離す事ができない。飲んで旨いとは感じない。飲み続ければ、どうなるか？はつきり、野垂れ死に至ると解る。分っていて、飲む自殺行為である。

昨年、台東区日本堤2の2の1、城北福祉センター前で、首吊り自殺をした彼（和泉氏）のことが、脳裏をよぎった。その前日、四月十五日の昼すぎ、玉姫公園を酔って歩く彼を見ている。背中にいつもとは違うものを感じたが、私は公園の中で黙って飲んでた。声をかけることをためらった。

何の抵抗もなく喉を滑り込んでゆく液体、アルコールが、命を奪ってゆく！死んで往くのだ。と飲む。死んで本望な事。とまた飲む。自己欺瞞ではないか。嘘をつき死んでゆくのではないか。命を奪ふ酒に酔いつぶれる仲間の中で、私も飲む…。

アルコール中毒者として依存に焦点を絞り込み、自分の実像を虚像としてではなく鮮明に写し出す必要がある。

チャンピオンに声を掛けられた。「おう、新年会をやろう。中に入れ。」「チャン、おはよう。」と私はテントの中に入った。山谷労働者福祉会館、日本キリスト教団伝導所のカーポートとして設計された場所にテントを張って住んでいる。

刑務所を出た彼が、この場所に住んで数年になる。

彼と私は連れだって和泉に線香をたきに出かける。目をとじ合掌する。

“高いところから、俺らを守ってくれ。俺の仲間も守れ。ゆっくり休んでくれ。また明日来る。”

城北センター入口の横で、その日の給食・宿泊・生活相談に並んだ人達が目に入る。

どの顔も沈んでいる。飢え、野宿、病氣そして野垂れ死に。かつて、行政の対応に酔った勢いで腹を立てた私は、この場所で暴れた。二〇〇一年十月四日の朝である。

そんな事を記憶の中から掘り起こして、何になる。取り返しのつかない事を悔んで何になる。しかし、あの時、声を掛けてさえいれば、何かの話しを、たとえアルコールを飲みながらも、出来たはずである。事実、私も彼も飲んでいた。互いの思いを吐き出すことが、酔っ払いの愚痴こぼしが、出来たはずである。

彼の死の前日の事である。

テントの中の石油ストーブの上に、餅を一つ乗せながら、チャンピオンがポツリと言った。

「二人だけの正月だ！」

コップを出し「飲むか」とまたポツリ。一升ビンを出し酒をつぐ。

淋しいのだ。

帰る場所と行く場所を失った果ての、テント生活で迎える正月に「かんばい」と言わず「馬鹿野郎、飲んでくれたばりやがれ」と。

餅を焼いて迎えた正月である。

路上に張ったテントの中で、生きてゆくために、餅を焼いて喰べる。彼と私は、向き合って黙って喰べた。互いの胸の内を去来するものは違うが、生きてゆく事は同じである。

場末の見事な正月である。

次は、いつ会えるか？

新宿西口を抜け、四号街路づたいに、中央公園ポケットパークへ向う。恒例の餅つきである。小雪舞う一月二日、なぜか、足が

この場所へ向くのだ。

芝の上に積もった雪とそっと握りしめてみて“東京の雪は、軟弱だ”と思う。白い雪と餅、そして白い影が路上に光る。路上を置いて生きる処はない。そんな思いに引きづられ、来た路とは別のどこかを辿って山谷に帰る。

来た路を帰るのは嫌なものだ。

“なぜ、路上には命の道が無いのだろうか。この思いは、野垂れ死んだ人達と重なって私の心の中に浮かんできてる。

思いだけで、今は考え行動にまで到ってはいない。



原真は一っ

生まれも育ちも貧乏 何一っない  
仕事も能力も彼女も  
一生これでお終わると思ふと  
自殺でもやろうか、殺さる。  
いや 宝に心でも買ふ夢  
何か 出さるゝとないが いさゝ  
殺さるゝでも何一っ出来ぬ毎日  
が続く。山谷でゴミ箱を  
あさりながら、



# 旅路から

五林 修



約束事で成り立つ社会に、こうもルールが多くなると、約束はしない方がよい。こう思うのだが、必要に迫られ、止むを得なくなればサイコロ振って丁か半かどちらかに賭ける。高松市内でバクチ場はないのか。東京山谷、日雇い労働者の街じゃあ、路上が貧乏バクチ場だ。

ノミ屋。と言って酒を飲むんじゃない。

寄せ場三点セット、飲む・打つ・買うは、世の常である。

宿場に飯盛り女がいて、夜はオシロイ塗って二階へ上がる。そこでバクチする訳があるか!?

何するのと言って暗黙の了解。何をするんだ、畑に種イモを植えてイモが出来たら、「御目でたい」のである。

はるかかなたに、幸せが幻の如く見える。

夢をおいかけたの旅も、夢も見る事に疲れ果てての感傷的逃亡

めいた旅も、ハネムーンを越えた醍醐味がある。(はずである。)

夢のなかに現実をみる旅である。

眠りに就いてみる夢のように消えてゆく現実の路上で、酒のトップを手に、白昼の夢にとらわれている。山谷労働者福祉会館の入り口で、その前の酒屋と立ち飲み屋の前で飲んでいる姿は、まざれもなく私であり、もう一人の私でもある。

救急車がサイレン音もなく停まり、呑んだくれを、喧嘩で血をあびた者に乗せてどこかへ消えた。交番の前でわめきともつかぬ事を大声を出してさげんでいる男がいる。

路上のソファアに座っている私の脇で、彼が静かな声で言った。「人間模様が、みえるぜ。」

夢のなかで描く人間模様も、場末の路上で酔狂に描く人間模様もどこがどうちがうのか、アルコール中毒、依存症候群の自分にはわからない。

頭がち割られ、裂け口を縫い合わせれば、歩いて帰ってくる。

脇の彼が、飲みながら言った。

「顔面に赤タン、青タン作って、タオルで冷やす馬鹿がいるが、ありゃあ本当は暖めるもんだ。」

喧嘩のブロの言うことを、「馬鹿は馬鹿でしょう」という言葉でかわした。

喉元すぎれば熱さ忘れる。性懲りのない野獣の群れる街。観光バスがガイドの姉ちゃんの「皆様、右手を御覧ください。この街は、かつて労働者の街と言われ繁栄を誇った時代もありましたが、現在はサファリパークとして利用されております。園内にはアル

コール人体実験場が建設され、アルコールのない世界に生きる人達の健康のために利用されています。」てな声が、幻聴として聞こえる。

出動回数東京一の日本堤消防署並びに浅草警察署そして第六方面隊「トラ箱」の皆様「呑んだくれの五林修です。あの世で宴会を準備いたしておりますので、御早めに御越しください。」

地獄の路上から、極楽の路上までの束の間の命を、「よくも鉄格子の中に押し込めてくれて」有難う。

私、無常ということが嫌いなんです。こう、ほざいたのは城北福祉センター管理課長「関」である。やだね、やだねったらやだね。御日さま西々日が暮れて、烏が東の空に飛んで行く。

昼と夜が逆転し、夢と現実が交錯しながら、徐々に真綿で首を締めゆく。一本の首吊りロープも一杯のコップ酒も同じではないか。今、香川県高松に来て、そう感じています。

.....

読んでもらって、何かを感じてもらおうような文章を書きたい。

路上生活者が、読み、書くことから始った「露宿」に一方的に自分だけの思いを晴らすだけのこれまでの姿勢を改め、新しい年が明けた一月十日、十数年に及ぶ「山谷」での路上生活に終止符をうったが、人生航路上の生活は続く。生活に取り組む自分の姿勢次第で「露宿」に寄稿する際の心構えもおのずと変化する。

とは言え、路上生活者が読み、書く、そして文芸誌にまとめあげられることに変りはない。

私がおかを感じる文章には、飾らないありのままを描いたもの

が多い。また自己の経験と重なるような内容も、何かを感じさせてくれる。もち論、読み手の受け止め方次第ということによる。

「まず、自己批判から始めよう」とは、山岡強一氏の講演集の冒頭の一文である。

「路上で生活する人たちに対する、正当な日本語を我々は持たない」これは、「路上の生」の著者、戸村政博氏のものであるが、自己批判からの言葉も重視したい。

寄せ場にこだわって来たつもりはない。居場所としてそこしかなかった。心の扉に錠と鍵をかけ、部屋の中であがいた路上だった。その中には外からは入ることも出来ず、出来るとすれば、自分で鍵を取り出した時である。

その時の体験で、何かを感じてもらいたいものを、今、少し時間が必要とするが、書きたい。

.....

思いの कोरोコロ 変る自分に、こだわりを生むのは、.....

高松 M A C (アルコール依存症リハビリセンター)

アルコールだけでなく、(アルコールを含めた) アルコール依存症の依存症候群の病者として

なぜ、自分はここに居るのか?

なぜあるのか?

あるが故にある。のだが

誰れもない雨の降る玉姫公園の内で、たき火をしながら夜通し飲んでた。.....俺達。

「真夏の夜の夢、  
我が心の想ひに  
寄せて」

田代 猛



～新宿連絡会、夏祭りに想ひて～

夏祭り 連絡会の歴史と重さを 刻み行く

～小さな庭の鉢の木を想ひて～

くちなしの花も 木も 夕日の中にあき

～梅雨時の一片の花を想ひて～

紫陽花に雨降りそそぐ 暗きなか 明るさ ありて言葉がありぬ

～梅雨時の涼風に想ひて～

一枚は 溪風のくる網戸かな

～或る野宿者の人を想ひて～

野良犬にあらざと 誇りたかく 行く ホームレスに

拾われた幼き犬

～我が小さき室内の花を想ひて～

いつまでも飾っておきたい 花束の 枯れゆくさま

しつかりと見る

～人生を花に例えの想ひに寄せて～

落ちたら沈む花にはならないで

「ハス」の花は、泥の水の中で たくましく 生きて

人 人に 美しさを 輝やかせ 心を慰さめる

そんな「ハス」の花になりたくて……と。

～人の心に想ひを寄せて～

夜は一つ 朝は二つ 人の心の変わり逝く むなしさに 涙…涙

…涙 頬に流れ出づ

～或る友に想ひを寄せて～

ずうっと ずうっと 親密だった あの頃は 今よりずうっと

ずうっと 貧しかったのに……と

→ 現実の社会に想ひを寄せて

真赤な薔薇の花には トゲがある トゲがある 刺して見たいよ  
この社会の現実悪……にと

→ 我が小さき眼に想ひを寄せて

小さな 小さな 針の中からニュースが見える社会が見える そ  
んな鋭い眼になりたい……と。

→ 12才の中学一年生長崎の幼児殺し事件に想ひを寄せて

渦まいて にごらない滝壺の水のように 育てたように 子は育つ

→ そして訪れて来る夏に想ひを寄せて

君 と僕 ひとり ひとり の夏が巡りくる

風の前をゆくある歳月

七月十四日

梅雨の激しき雨音 窓外をたたく。NHKラジオ深夜便 メン  
デルズゾン真夏の夜の夢 交響楽を耳にしながら 二時三十分  
眠れぬ深夜 記す。

再び訪れる原爆記念日

「ナガサキ」の被爆者

の一人としての声

田代 猛

あなたの心に問う 國家の名の下に人を殺し 殺され  
る戦場え

あなたは見過ごすの?……戦争をするための有事法を  
あなたは従うの?……戦争に協力する有事(戦争)法に

そのかげで核兵器や戦闘機……戦争で儲けようとする  
人があるのに

私は生かしたい! 日本の平和憲法を

私は拒否する! この世のいかなる戦争も

私は知っている戦争は人間が起こすものだ

私は気づいている武力で得られる平和はニセモノだと

「備えあれば憂いなし」なんて小泉首相は言うけれど

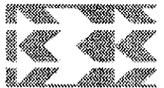
私は選ぶ 私は誓う 「ヒロシマ」「ナガサキ」が誓う

平和への備え

求む! 軍備なき「備え」



日だまり  
'00 10 14 23  
秋戸 空



賭けた生があっちこちにある  
情景を私は視つめておりました  
季節のない年、中、行、事のような  
季節が巡って来て、「路上の生」は  
毛布の中へと潜り込んでいたのでした

ここは〈世間〉からも捨てられた  
山谷（よせ場）  
過去も現在も未来も〈世間〉から  
視捨てられる・・・と

私もそう視ていて・・・でもそこに住む  
路上で生きる人たちは  
人である以上〈世間〉よりも  
真剣に自分の生を考えていたのでした  
皆な旅（仕事）も出来なくなり  
〈世間〉は仕事をくれもしなかったの  
でした

その結果アルコールをいたる処で売って  
いたので自らの唇（くち）を仲間と一緒に  
アルコールに近づけていたのでした

その空しさを〈世間〉は分かうと  
しないのでしたそれは路上で生きる人達  
とは  
共存する事も出来なかったのでは  
う・・・？

その裡（なか）にもデマゴークが乱れとび  
〈行政屋、政治屋〉どもがたくみに  
それらを操り

〈世間〉は〈マスコミ〉を見ては  
それを現象面でしか物事を

視つめられなくされていたのです・・・

ここには〈教育〉というものが・・・  
《ある〈政治屋の（三國人）発言》もあり》  
深くかかわっていたのでしよう

この時路上で生きていた人たちは

ある夜、寝床を青少年たちに急に襲われて  
生命（いのち）をうばい去られてしまっ  
た仲間が

何人もいたのです

〈世間〉は、ほんの僅かな人達を・・・のぞ  
いて

その殺人事件を無視していたのでした  
〈マスメディア〉はよりあおりたてるよ  
うに

そう云う記事をかきたてるのでした  
〈世間〉は自らのモラルの汚れを

見る事もしないのでした  
エセ白人種（につばん人）の者の見方は  
アジアやラテン・アメリカ（インディ  
ア・アメリカ）アフリカを  
人間とは見ずにただのハエでも視るよう  
にこの国々の人達を一つのハエの塊でも視  
るようにはしか  
視る事も出来なかったのです。

エセ白人種どもは〈政治屋〉に、という  
手段を使ってこの外国の国ではこの人達  
から

（この国のボス）を使って（あまい汁を  
吸わせて・・・）その大地を取り  
挙げていたのでした・・・

〈先進国〉はその為〈筆榮〉した力と徳の

努力と云う

欺輔を持ちながら、この連中どもは  
好きなようにそれらの国々をのし歩いて  
いるのです

〈はンエイ〉がこの国家（ニッポン）の  
〈世間〉

にもたらされていたのです  
それでもあきたらず

この国家の中にも〈第三世界〉Ⅱ（よせ場）  
を作り出していたのでした  
それが前行などで著わした〈社会性〉で

あったのでした

路上で生きた人達も (世間) と同等の人間だったのです。が・・・

路上で生きる人達は世間の思うようなもの想いは、持つ事はできません

・・・誰かを喰らって (自分だけ喰らうんだ・！)

と・云う事も考えることもしないでしよう。

この姿が (よせ場) の日雇い労働者なのです。

・・・自分で

お書きになれば  
よろしい!

(マヤコフスキー詩行)

'01 3 18

秋戸 空



・・・こんな事たのめる (俺たちが "生きる" って事だ!)

〈政治屋〉なんて

一人だっついていやしない・・・!

《政治屋 (官僚) どもに (行政官僚)

どもに》

俺たちの気持ちなんて

分かりっこねえよ・・・でも

俺たちは、あの連中に云うぞ!

「俺たちは、生きてるんだ!」・と

それを聴こうともしない

それを聴く耳も持たない

あんたたちは、あわれで

気のどくで、同情してあげよう・な

俺たちの仲間になればいいの・さ

俺たちは、いつでも迎えてあげる

用意は出来ているっ・て・・・さあ

俺たちは、同情なんて・求めない!

俺たちも生きてるって・事を

ちやんと視すえてるし・・・

あんた方・視すえてほしい・んだ!

生きてるって事を

認める・と云っているんだ!!

あんたたちは、俺たちの声を

無視している

聞こえないふりして

俺たちを・まっすぐ

視つめられない・・・

そして俺たちは、いつもほっばらかさ

れた・ままだ

〈政治屋〉さんよ (行政屋) さんよ

俺たちだっついて怒りが・憤りが

爆発してしまえよう!

そしたら・・・

官憲 (キドウ隊と云う暴力装置) 出動

させちまって

俺たちを (バク) り・弾圧する

(ニタ、ニタ笑いながけナチ棒振り回

すデカ野郎・・・)

俺たちを鉄格子に閉じ込めて・・・

それで事が解決するとも思っ

ているのか、

〈行政屋〉!!

・・・俺たちは、住む処の書類

のことを云っていただけだ!!

それなのにキドウなんか

出しやがって

書類と云うものは

俺たち書くより

あんたたち自分で

お書きになれば

よろしい!!

って云ってるんだ!

あんたたちの仕事だろ

あんなたちの仕事取り上げても

いいのかい…?

(行政屋) さんよ (政治屋) さんよ

仕事とりあげたら俺たちの

仲間になるよ

だからキドウなんて (暴力装置)

出すんじゃない!!

03.7.20

今年は、冷夏になるのでしょうか。  
去年の7月20日は、とても暑かった  
ように思います。夏は好きなんです  
んですけど、一方で、冷夏でもいいな  
と悩んでしまいます。

# 俳句など

お迎かいは

まだまだ早い飯の味

風去りて

椿の木一本花二輪

朝もやに

心静かにはれお待つ

荒れにわに

柿の木一本 柿一つ

6 / 23

意見され

千鳥足かよ

見まい客

夜櫻に 時お忘れて

乙姫に 丸はだか

とりの市 おかめに

まよう 内の馬鹿

# 小一

しわよせて

意見するの

母なれば

しわよせて

小言云うのも

母なれば

大病も勝負と見れば

負知らず

6 / 23

白い花びら

ちりそめて 盆も近かづく

八十八夜

流れ星

くもり空

ぼたりとおちる

ひとしづく

6 / 23

女郎船頭 客のせて

きのう西 今日 東 気楽な

かぎよだ 船頭は

船頭 お むこにすりゃ

あさい ふかいは 竿 しだいよ

6 / 25

## 過去への旅

昨日に生きたと 思えば、思うほど  
昨日と今日の線りがえし  
どうしてだろう、昨日に来てはよう  
今日の現実 押しめぬ毎日  
どうしようもない、小さな俺の力  
夢だけは大きい、何度もおなじ  
ことの繰り返し

1936.29

## 希望

希望とは食わされる物か  
いや食われない、仲間と  
話したか、来たる毎日  
希望とは手か、とどかない  
星みたいなものか、もしたない  
一番近い星でも1億光年先  
一生でも夢で終わってしまう  
来ただけでも気が遠くなる  
(もう、来ない) 来よう  
俺の希望



プラチナの夢  
重い、重い、俺の首に何か  
まきついてる、重いもの、  
プラチナの首輪、夢だ  
現実であってほしかった  
現実の押しめぬ毎日 地獄の  
生活 ああ俺の一生  
お金がほしい、金がほしい



生きがいと執着の  
違っていて 何でしょうね。  
一念を叶えるためには。  
あきらめず、願いを続ける  
ことが大切という人もいるし  
一つ事にこだわると  
同りが見えなくなって、我をも  
見失ってしまう。それを執着と  
呼ぶ人もいる。  
ああ、難しい。



# あか い 花

はり師いが丸

「百人一首を教えてやる」と言っただけで父親が、まず手ほどきしてくれたのは、なぜか花札だった。鮮やかな原色で描かれた48枚の厚手の札を初めて掌に収めた時は、世の中の秘め事をひとつ覚えたようでわくわくした。我が家ではもっぱら「おいちよかぶ」が流行った。と言っても、つまらない話、金を賭けたことはない。はじめはマッチ棒を点棒代わりにしていたが、それはそのうちクールミントガムに変わった。父親がパチンコでガムばかり換えてくるようになったのだ。当時私は小学生だった。

裏の家に住んでいた加川さんのおじちゃん、唯一家族以外の対戦相手だった。加川さん夫婦は漆器の仕事をしていた。私が裏庭にみょうがを掘りに行く時や、近所の子ども同士で鬼ごっこをして駆け回る時、おばちゃんはいつも裏の上がり口で、手を真っ黒にして器を磨いていた。おじちゃんは250ccのオートバイに乗って町の仕事場に通っていた。夫婦ふたりでヘルメットをかぶって出かけることもしばしばで、それは、えらく格好よく、そして、照れくさく、子どもの目に映った。

私の母親が家を出た後、彼女の自転車がしばらくないことに気づいた加川さんのおばちゃんが、「うちにもご飯を食べにおいで」と、時折夕飯に招いてくれるようになったのがきっかけだったと思う。花札は、加川さん宅での食事の後のたのしみとなった。

「何が食べたい？」と訊かれると、私たちは「からあげ！」と声をそろえて答えた。おばちゃんの鶏のからあげは絶品だった。それにぬか漬けや山菜の煮物など、テーブルいっぱい皿を並べながら「おばちゃんちは何もないのよ」と言うのが口癖で、おばちゃんは、ごはんを3杯お代わりしても、「もう食べないの？」と満足してはくれなかった。

加川さんの家にあるのは、任天堂の大統領印の物でなかなか年季が入っていた。姉には藤とあやめのカス札がつき、私には、桜と牡丹のやはりカス札が、よく「かぶ」を呼んだ。金も賭けない子ども相手の遊びによく付き合ってくれたと思う。それを案じてか、父が時折、自分の将棋の相手におじちゃんを奪ったので、私たちは退屈した。将棋は飛車角落ちでも歯が立たず、囲碁は並べ方さえ知らなかった。

私が東京に出て間もない頃、おばちゃんが急逝した。加川さんの家には、その後私の家が火事を出し、引っ越したのを境に、訪ねることもなくなっていたが、そのことが、「大きくなったな」というセリフをおじさんに吐いてもらうことにつながったのは救いだった気がする。女房の不在に、どうにも繕い様がない程小さくなってしまったおじさんの姿を見るのはあまりにもつらく、本で覚えてきたようなお悔やみの言葉を吐くことは、どうにもためられた。

けれども、たとえ火事にならなくても、加川さんと花札をすることは、遅かれ早かれなくなっていただろう。そういう年齢だったと思う。そして、燃えてしまった我が家の天狗印の花札も再び購入されることもなく、以来、私は外でも花札を手にするとはなかった。たまに「コイコイ」をやっているおじさんたちを見かけると、「おいちよかぶはやらないのかしらん」と、聞こえないように呟くことはあるけれど。

## 意見広告

～すべての国民並びに、有権者の皆様へ～

500円カンパ選挙で清潔で、責任感があり、  
国を真に愛する人を、国会へ送ろう！

～すべての候補者の皆様へ～

500円カンパの郵便振替口座を開設し、  
ボランティア選挙を呼びかけよう！  
選挙はがき、選挙ポスター、選挙公報にも  
カンパの送金先を記入しよう！

～すべての選挙管理員会の皆様へ～

すべての有権者と国民、並びに、すべての政党と  
候補者に対し、カンパとボランティアによる  
明るく正しい選挙を呼びかけてください。

### ホームレスの代表を国会へ送ろう！

(マスコミ関係者のご協力をお願いします)

500円カンパの送金先振込先  
郵便振替口座 00160-6-190947 「ろじゆく編集室」  
\*「五淵提案に賛同」と記載の事

2003 (平成15) 年7月27日 五淵四郎



悔古

次号27号は11月1日発行予定です。

投稿者の皆さん、原稿締めきりは  
10月5日必着にてお願いします！

編集後記

「ひまわりに 笑顔をもらい ゆく道の  
暑さ陰しさ なんのそのだよ」

すっかり夏らしい空気漂う夜中に編集作業をしています。夏はなんだかノスタルジックな気分。蝉の声、盆踊りの灯り、小さな子の浴衣姿。いつもの街角も懐かしく目にうつったり。ひとつひとつのいろんな事を丁寧に感じていきたいなと思う季節です。露宿発行の頃は“残暑お見舞い申し上げます”でしょうか？（お）

露宿ペン倶楽部短信

今年の夏は冷夏なのだから猛暑なのだから良く分からない夏でした。おかげで体調を崩している方も多いかと思えます。例年夏号は季節柄か原稿量が減るのですが、今年は幸いに紙面一杯の原稿が集まりました。暑い最中の執筆ご苦労さまでした。

新宿夏まつりも無事に終わり、早いもので晩夏から秋へと季節が変わっていきます。季節が変われど相も変わらぬ路上の現実。この現実への批判がどこまでこの社会に突き刺さるのか？露宿の試行錯誤はまだまだ続きます。

# Rojuku

## 定期購読大募集

購読費・スポンサー費  
送り先  
郵便振替口座  
00160-6-190947  
「ろじゅく編集室」

この雑誌は、路上生活者の方達が読み、書き、表現をする場を提供する為、つくられました。一冊でも多く雑誌を印刷し、路上生活者の方に手渡したいと思い、利益が出れば炊き出しのお米代にしたい為、心苦しい限りですが、多くの方のご理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

# 「ろじゅく」

### 〔露宿定期購読の御案内〕

毎号確実に読者のお手元に届けるために当方では定期購読を承っております。

定期購読8回分 5000円（郵送料込み）

定期購読4回分 2500円（郵送料込み）

一回ごとの購入でも大歓迎。

一冊は送料込みで660円となります。

### 申し込み方法

郵便振替用紙（00160-6-190947ろじゅく編集室）に定期購読もしくは継続購読とお書きになり、住所、氏名を明記の上送金して下さい（発行ごとに郵送します）。尚、郵便振替の他、切手での受け付けもしております。FAX、メールにても注文承り中。

まとめ買いはお安くなります。

2冊以上は送料無料、5冊2000円、10冊3500円、50冊15000円（いずれも送料込み）となります。

路上文芸総合雑誌「露宿（ROJUKU）」第26号 2003年9月1日発行（隔月刊）

主宰・笠井和明 編集/発行・ろじゅく編集室 〒160-0023 東京都新宿区西新宿4-32-4-603  
TEL/FAX 03-3373-9878/090-3818-3450（笠井）

Eメール・rojuku@d9.dion.ne.jp URL・http://www.d9.dion.ne.jp/~rojuku/

郵便振替口座 00160-6-190947 加入者名「ろじゅく編集室」

販売協力・新宿連絡会、露宿ペン倶楽部

印刷・株式会社ラジオグラフィー

定価500円